香山六郎と聖州新報（三）
―聖州新報創刊から廃刊まで、戦後の香山―

半　澤　典　子

はじめに

香山研究に関して、「香山六郎と聖州新報（一）」および「同（二）」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第13号、2014年および第14号、2015年）において、香山のブラジル渡航の理由は徴兵忌避にあった事、「一渡航者」から「一移民」へと移民としての自覚が高まる中で、「一移民」から「一新聞人」として立ち上がろうとした背景には、香山の移民に対する意識の変換が存在したことを論証してきた。

本稿では香山が「一新聞人＝情報提供者」としての意志を固めた後、ブラジルに於ける日本語新聞・『聖州新報』（以後、『聖報』と略記）を立ち上げ、１）地方紙としてどのような特徴を持たせ、何をアピールしようとしたのか（バウルー時代）。また、２）なぜバウルーからサンパウロ市に進出したのか（サンパウロ時代）。３）第二次世界大戦後再刊しなかった背景には何があったのかなど、『回想録』から抹殺された多数ページに及ぶ『清書原稿Ａ』（以後『原稿Ａ』と略記）を注視し、従来の『回想録』を越えた新たな香山像を描くことを試みる。

香山研究論は、香山と接点のあった清谷（1998年）に顕著である以外ほとんどない。清谷は香山を「終生文学青年的心情を持っていたのではないか」と評し、文学的要素の多い新聞であると特徴づけている[1)]。北杜夫（1982年、1988年）は香山六郎のノンフィクション的作品を書いているが、そのほとんどの文言は『回想録』そのものであり、彼自身「盗作と言われかねないこともあえて承知で、わざと小説的潤色を避けた部分もある」と記しており、北自身の香山論を見出すことは困難である[2)]。

１）清谷益次「新聞は移民にとっての何であったか」『人文研』No.2、人文研、1998年：８頁。清谷は歌人香山との接点を持っていた。

２）北杜夫『輝ける碧き空の下で』第一部（上）・（下）、新潮社：1982年、1988年。随所。

ここで『原稿A』から『回想録』作成段階での内容の削除について触れておく。拙稿（2013年）で『回想録』の自伝としての限界について述べたが、今回の調査で2304枚とされる『原稿A』のうち、400枚以上が刊行委員会によって削除され、中には数頁分をまとめて書き直ししたり書き足したりしている個所もあることが判明した[3)]。削除された内容は個人、家族、文芸に関する記述に集中している。個人的中傷や作品鑑賞的な部分が削除されたと思われる。家族では約50頁分が削除されている[4)]。これらについて刊行委員会は「まえがき」で、時代的に比較的新しい出来事であるため削除したと述べているが、『回想録』の自伝としての意義と限界を再認識する必要があると思われる。

第１章　聖州新報創刊（バウルー時代：1921年～1934年）

第１節　新聞創刊の要因

『聖報』は主要紙がサンパウロに拠点を置いていたのに対し、ノロエステ地方のバウルーという地方都市に根拠を置いていたことから、サンパウロ州内の日本語新聞の中で最古の地方新聞といえる。『聖報』の創刊要因を、香山自身の生活史から浮上してきた要因および生活環境から派生してきた要因に分類すると以下のようになる。

香山自身の生活史から浮上してきた要因については、前述の拙稿（2013年、2014年）で分析し、父親香山俊久の『不知火新聞』発行、９歳の時の九州日日新聞の植字工の経験、大学時代の雑誌編集・出版の経験、移民船「笠戸丸」内での船内新聞発行、大阪朝日新聞のブラジル通信員としての実績などから、香山には幼少時より新聞作りの素地があったことを論証した。

一方、生活環境から派生してきた要因としては、８項目を列挙した。

第１に、香山にはノロエステ開拓のピオネイロ（Pioneiro：先駆者）としての自負があり、日本人移民の実態、すなわちブラジルの主流言語であるポルトガル語の新聞が全く読めず日本語の情報に飢えていた彼らに、いち早く対応したいとの強い願望と使命感があったこと。

３）１頁400字。頁全体の削除は第１部12頁、第２部30頁、第３部161頁、第４部110頁、移民50年祭以降30頁程。半分前後削除が凡そ同数程度。

４）ジェニー脇坂『原稿A』1962年：1401頁～1451頁。現在は人文研が保管。

第２に、ノロエステ地方への日本人の集住が進み、地域情報を即時伝達すれば購読者獲得に繋がるのではないかとの、香山の経営試算があったこと。事実、香山が最初に『聖報』を起ち上げたビラ・ファルコンは、バウルー駅南西部、バウルー川岸のノロエステ線とソロカバナ線の中間に位置し、両線の離発着を容易に知ることのできる場所であった。

第３に、1921年１月のバウルー領事館開設により、日本からの情報を迅速・的確に購読者に提供できると判断したこと[5)]。

第４に、９月７日はブラジルの独立記念日で、香山が発刊日を独立記念日と重ね合わせることで、新聞創刊の意義を見出そうとしていたこと。

第５に、1917年、第一モンソン移住地で請負作をしていた時、在サンパウロ総領事館三隅棄蔵通訳官からの、植民地実態調査の依頼を完遂したことがあげられる。三隅は熊本県下益城郡杉合村生まれで、東京帝国大学法科大学政治学科を卒業後サンパウロ総領事館に勤務し、1918年同領事館副領事としてリベイロンプレート分館勤務となっていた[6)]。香山は調査内容を１ヶ月ばかりで一覧表に作成して三隅に送付し、彼からすぐ謝意を表す返事を受け取っている[7)]。この作業の完遂が、香山に以後の新聞発刊や年鑑作成等への自信を持たせたと考えられること。

第６に、香山は「ブラジルに於ける大和民族の植民地」と題し、ペンネーム「聖州子」で大阪朝日新聞（通称：大朝）に通信していた。この記事は当時文部省派遣でロンドンにいた土屋員安叔父からの手紙にも好評と記されていた。大朝新聞のトップ記事に掲載されたことが、新聞発刊に大きな一歩を踏み出す要因となったと思われた。後見人であった叔父からの通信は、叔父に香山のブラジルでの活躍が認められたことを示すものであり、香山にとってこれ以上嬉しい出来事はなかったと云えよう。しかし『原稿Ａ』の筆者ジェニー脇坂（旧香山）は、大朝から送られてきた新聞には、香山の名もペンネーム（聖州子）も出ていなかったという。内容を読めば父親の書いたものとわかるが、名前が出ていなかっ

５）在バウルー領事館には副領事多良間鉄輔、書記生古関富弥、別井元女が配属されていた。外務大臣官房人事課『外務省年鑑』外務省、1922年：161頁。

６）外務大臣官房人事課『外務省年鑑』外務省、1923年：316頁～317頁。

７）香山六郎『回想録』人文研、1976年（以下、香山、1976年と略記する）：281頁～282頁。

SEMANARIO DE SÃO PAULO
聖州新報
殖民者の長短
LUCIANO MAGGIORI
御旅館
BANCO ESPECIAL DE YOKOHAMA, LTD.
日本旅館
醤油

図１　藤田総領事揮毫の『聖州新報』タイトル（1923年２月23日第71号、第１面）。

ブラジル日本移民史料館所蔵、国立国会図書館監修マイクロフィルムより

たことは非常に残念であったと述懐している[8]。『回想録』の中には香山は大満足をしていたと書かれているが、その家族はそうでなかったことも事後判明されたことになる。

第７に、創刊直前、当時のサンパウロ総領事館総領事藤田敏郎と奇遇な縁があったことである。香山は東京で苦学を強いられていた1906年当時、友人関力男（旧姓太田）の妻チカの叔父関当純が、藤田敏郎の実兄であることを知っていた。関力男は香山が京都在住の折、土屋員安叔父の家の書生であった関係で、藤田総領事は香山の門出を危ぶみながらも祝儀を忘れず、新聞名『聖州新報』の揮毫を快諾したのだ[9]（図１）。

第８に、香山はエスニックメディアであるはずの既存の日本語新聞が、

８）香山六郎の次女、ブラジル国籍名ジェニー脇坂（旧香山）、日本国籍名ジェニー秋子香山（2015年10月現在90歳）との国際電話インタビューにより確認。2015年10月22日。

９）ジェニー脇坂『原稿A』1962年：602頁が、香山、1976年：102頁、『聖報』1923年２月23日第71号第１面に該当。

日本国民の生活と移植民生活の真相を伝えないことに不満を抱く移民の一人であったことである[10)]。香山は既存紙ばかりか、領事館員や海外興業（以後、海興と略記）の役員たちからも、移民蔑視の臭気を嗅ぎ分けていたのだ。この差別意識と不満が香山を揺り動かし、移植民生活に即した新聞を発行して行こうと決心させたと考えられる。

これら諸要因から、移民の目線で移民たちに情報を提供することは香山にとって当然のことであり、その意味で、香山は移民との共生を常に心掛けた新聞人であったといえる。

第２節　日本語新聞概要

1910年代後半からコーヒー園のコロノ（契約労働者）としてサンパウロ州のコーヒー園に入植した日本人移民たちは、自営農を目指して、コーヒー適地といわれていたノロエステ地方に進出するようになっていた。この移民たちの移動と定着は、エスニックメディアとしての日本語新聞の創廃刊を左右した。主流言語であるブラジル・ポルトガル語の新聞の読めない日本人移民にとって、ブラジルのエスニックメディアとしての日本語新聞は、不可欠の情報源であった。新聞には情報伝達の即時性・俊敏性・公平性などが要求されるが、新聞社側には、購読料や広告料収入を経営財源としなければならない事情があるため、新聞は購読者の増大によって組織や技術強化を図りつつ、購読者と共に発展してゆく流動性あるメディアでなければならなかったのである。

1958年の移民50年祭を期したブラジルの日系人実態調査や、1964年の同調査から推定された1925年当時のサンパウロ州の日本人人口は37,222人、そのうちノロエステ地方には28.8％が集住し、1935年には148,280人のうちの30.6％と最も高い集住率を示していた[11)]。これらのデータから、当時の日本語新聞各社がノロエステ地方を購読者獲得のターゲットとするのは当然であったといえる。現に『聖報』が経営軌道に乗る前に

10）エスニックメディアについて白木繁彦は、「当該国家内に居住するエスニック・マイノリティの人々によって、そのエスニシティの故に用いられる情報媒体」と規定している。白木『エスニックメディア研究』明石書店、2004年：23頁。

11）山本喜誉司他『在伯日系人人口推計』Sociedade Paulista de Cultura Japonésa,São Paulo BRASIL. 1957年：19頁。T.Suzuki, ”*Mobilidade de dos Imigrantes Japoneses no Estado de SãoPaulo,1915－1955*” *IMIGRACÃO JAPONESA NO BRASIL*, ブラジル日系人実態調査委員会.資料編、1964年。

『伯剌西爾時報』（以後『時報』と略記）は1924年、奥ノロエステの中心地リンスに支社を開設していたし、『聖報』が1930年１月15日リンス支社を、同年４月８日にアリアンサ支社を開設すると、『日伯新聞』（以後『日伯』と略記）は、1930年３月にバウルーから250kmも北西にあったアラサツーバ支社を、翌年10月にはリンスに移転させている。このように新聞各社は、限られた日本人移民に自社の新聞を購読させるために凌ぎを削っていたのである（図２）。

1930年、サンパウロ州の新聞は706種発行されており、そのうちポルトガル語以外のエスニックメディアとしての外国語新聞は、総数の７％（181種）であった[12]。『聖報』がバウルー市よりサンパウロ市へ移転する頃までに発刊された日本語新聞は８社であった[13]（表１）。なお『日伯』と『時報』・『聖報』とのノロエステ地方における詳細は、拙稿（2015年）を参照願いたい[14]。

日本語新聞として最初に発刊されたのは週刊『南米』であった。新聞の多くはサンパウロで発刊されており、地方に拠点を置いた新聞は『聖報』、『アリアンサ時報』、『ビリグイ民報』の３社にすぎない。創刊後社主が変更したのは『日伯』で、創刊者金子保三郎は創刊３年目に三浦鑿に譲渡している。『週刊「南米」』、『日伯』、『時報』の各創刊者がアメリカでの新聞作成経験者であったのに対して、『日伯』三浦と『聖報』香山は、ほぼ同時にブラジルに到着し、香山は金子から、三浦は星名からそれぞれ新聞作りの手ほどきを受けていた。彼らは互いに新聞創刊以前の個人的事情を知っていたことなどから何かと紙面上での対立をしていた。『時報』は、週刊『南米』や『日伯』への対抗意識をもって移民の教育を掲げて発刊されたこともあり、特に『時報』黒石は『日伯』三浦と常に対立し、徹底的に三浦追放策を完遂させた人物であった。なお、社主が一度も変更しなかったのは、『時報』黒石と『聖報』香山の２人だけである。特定の機関や特定の目的によって創刊されたものは週刊

12）「ブラジルには新聞がどれ丈？」『日伯』1931年７月30日第739号第３面。

13）Satomi Miura, *La presencia de la prensa de los Nikkei en el contexto de México antes de la Segunda Guerra Mundial,* Asociación Latinoamerica de Estudios de Asia África　XIII Congreso Internacional de ALADDA. 2010. 清谷益次「新聞は移民にとっての何であったか」『人文研 No. 2』人文研、1998年：３頁～10頁。

14）「ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞の果たした役割」『立命館言語文化研究』26巻４号、立命館言語文化研究所、2015年：87頁～101頁。

表１　1910年～1930年代のブラジルの日本語新聞

番号	新聞名	創刊年	創刊地	創刊者名	特筆事項	発行部数	廃・終刊年
1	週刊『南米』	1916/１/１	サンパウロ	星名謙一郎 鹿野久一郎	日本語新聞の先駆け。ソロカバナ線、プレジョン植民地分譲売買のための広告的要素大。	週刊・500	1918/12/４
2	日伯新聞	1916/８/31	サンパウロ	金子保三郎 輪湖俊午郎	1919年三浦鑿三社長。伯剌西爾時報との競合。日本国及びブラジル政治批判による三浦のブラジル国外追放事件により廃刊。	24,000	1939/５/27
3	伯剌西爾時報	1917/８/31	サンパウロ	黒石　清作	日伯新聞への明確な対抗意識。当初伯剌西爾移民組合機関紙で、移民のための新聞を標榜。1922年から黒石による個人経営。	8,200	1941/８/９
4	聖州新報	1921/９/７	バウルー	香山　六郎	地方創刊の日本語新聞の先駆け。移民の立場、移民目線での報道。ノロエステ地方の日本人移民の支持大。	10,000	1941/７/30
5	南米新報	1928/６/00	サンパウロ	坂井田善吉	1923年創刊の月刊『南米評論』を週刊新聞化。評論・雑誌風で社会的融和性の欠乏により、経営上の進展を見ず。	3,500	1931/12/19
6	日本新聞	1932/１/14	サンパウロ	翁長　助成	1932年『南米新報』を買収し改名したもの。社主翁長の日本的精神に囚われない二世を見据えた記事内容。	7,500	1941/８/０
7	アリアンサ時報⇒日伯共同新聞	1930/４/９ 1937/５/12	アリアンサ	宮尾　厚	日本力行会アリアンサ支部青年会機関誌。アリアンサ発展を図るための記事に異彩を放つ。	5,500	1941/０/０
8	ビリグイ民報⇒ノロエステ民報	1932/６/25 1934/４/25	ビリグイ	梶本　明	ビリグイ青年連盟の機関紙であったが、1933年の同連盟の解散により、1934年梶本が単独再刊。ポルトガル語版を挿入。	4,500	1933/12/０ 1941/７/０

各紙等より、筆者作成

『南米』のほか、力行会アリアンサ植民地機関紙『アリアンサ時報』、ビリグイ青年連盟機関紙『ビリグイ民報』などで、発行部数も5,000部足らずであった。また、二世を購読者に取り込む工夫をしていたのが『ビリグイ民報』と『日本新聞』であった。『ビリグイ民報』社主梶本明はカリフォルニア生れだが、家族とブラジルへ移住しビリグイ植民地で活動した人物で、ポルトガル語版１頁を挿入するなど、一世ばかりでなく

二世も購読者のターゲットとしていた[15]。また『日本新聞』は、二世を見据えた「伯主日従」を掲げた内容を盛り込むことで、他社との差別化を図っていた[16]（表１）。

購読者数や発刊年数などから日本語新聞の代表とされるのは、中央紙の『日伯』、『時報』と地方紙の『聖報』の３紙といえよう。この３紙は社主同士の個人的関係に対立の構図が描けるほど、紙面上で厳しい論戦を展開している。長期間新聞を発刊していたのは『時報』であった。『日伯』は社主三浦の国外追放により、廃刊を余儀なくさせられた。その点『聖報』は、バウルーから1934年末にはサンパウロに進出し、中央紙の２社を凌ぐ勢いで日刊紙を発刊するなど、着実に発展していたといえる[17]。

第３節　聖州新報概観

1.　創刊時情勢と発刊状況

『聖報』発刊に当り香山は、『時報』紙上に以下のような「聖州新報発行予告」文を掲載し、９月７日創刊している[18]。

> 今般バウルー市に於きまして『聖州新報』と呼ぶ邦字週刊新聞を発行致します。（略）『聖州新報』は私一個の独立経営で何等覇絆に囚はれぬ新聞であります。何者にも媚びず何物にも惶れず恒に同胞の味方となり相談相手となる新聞であります。同胞の深刻なる実生活に触れ、実際問題の記事を以て満たされ居る処に趣味と実益との旺溢（シタ）新聞であります[19]。晩くも来五月末頃までには初版を発

15）香山『のろえすて日本人年鑑』聖報社、1928年：103頁。父梶本菊次郎他の名前あり。

16）「悲しき退社」『聖報』1932年３月15日第644号第３面。

17）各社を調査するにあたり、以下の資料を参照した。①永田稠『ブラジルに於ける日本人発展史下巻』同史刊行会、1953年：258頁～268頁。②香山六郎『在伯日本人移植民25周年紀念鑑』聖州新報社、1934年：随所。③人文研編・発行『ブラジル日本移民・日系社会史年表』1996年：随所。④移民70年史編纂委員会『ブラジル日本移民70年史』ブラジル日本文化協会、1980年：251頁～273頁、284頁～292頁。⑤ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会他編『ブラジル日本移民百年史第３巻』風響社、2010年：83頁～104頁。⑥細川周平『日系ブラジル移民文学Ⅰ・Ⅱ』みすず書房、2012年、2013年。⑦清谷、1998年：３頁～10頁。

18）「聖州新報発行予告」『時報』1921年４月29日第186号第２面。

19）（　）内は筆者加筆。

行致します。（略）　　大正10年４月21日

バウルー市　聖州新報社　　香山六郎

同胞諸兄姉

香山は、ノロエステ地方のバウルー市に活動拠点を置き、創刊から終刊まで、ただし終刊はサンパウロ市内であったのだが、一貫して編集に従事していた。一方、創刊期の新聞は手書きで、ジンコ版（A zincogravura：亜鉛版）による印刷であったため、手書きゆえの読みにくさ、欠号の多さ、編集技術の未熟さ、印刷機器の不備などのマイナス要因があった。1921年９月７日が創刊第１号で、1934年11月13日第905号がサンパウロ市移転直後の発刊第１号、1941年７月30日第2,336号で廃刊となっている。しかし、全紙面が現存するわけでなく、1921年９月７日の創刊号から1923年２月23日以前の新聞は見当たらない。また1933年３月から1934年３月までの、ほぼ１年間の新聞もほとんど存在せず、欠損版は100号分を超えていると思われる。

創刊にあたり、香山はバウルー市役所に新聞名の登録を済ませ、発行許可を得ている。登録名はSemanário de São Paulo, Jornal Japones、購読料は年間15ミルとある。当時の『日伯』の購読料は年間18ミル、『時報』が15ミルであった。香山は『回想録』の中で、サンパウロの日本語新聞の購読料は30ミルだったから半値で売り出したことになると書いているが、事実に反しており香山の記憶違いが生起していたと思われる[20]。当初は週刊（Semanário）で毎週金曜日発行であった。中央紙も金曜日発行であったが、輸送手段の未発達のため、ノロエステの奥地では１週間の遅配となり、移民たちには旧聞しか伝わらなかったことを見越しての香山の発行策であったと考えられる。ジンコ版は枚数を重ねるとインクが染みて文字がぼけてしまうため、多量の印刷はできず、何日かかけて印刷したものを集め、明瞭なものを200部発行するのが精一杯だったようだ。この発刊に関する資金繰りに香山は苦心しているのであるが、強力なスポンサーのない『聖報』を支援したのは、各地で苦労を共にした旧知や、ごく僅かなバウルー駅前の商業者たちであったという。彼等は香山の姿勢に哀れみではない同情と支援の気持ちを示した。このような

20）香山、1976年：326頁～327頁。年間購読料は『日伯』1924年２月22日第361号（現存する最古版）と『時報』1921年９月２日第204号により確認した。

ところに香山の人徳が表出されていたと考える。

当初、領事館関係者やサンパウロの各紙は、香山の新聞作りを相当軽んじていたようだが、次第に理解を示すようになっていった。『聖報』の発行部数は創刊時の200部から、翌年には800部にも増大している。広告は香山自身が「お情け広告」と自白しているように、サンパウロ市やノロエステ沿線およびソロカバナ沿線の商店や日本旅館などの案内、土地売り広告などであった。事実、『聖報』1923年２月23日第71号第１面によれば、シチオ（sítio：小農場）売却、旅館案内２件、醤油会社宣伝、日本貿易株式会社、横浜正金銀行案内などが紙面の半分を占有していることがわかる。原稿は香山が書き、筆記は細字の綺麗だった畑山伸太郎が担当した（図１）。畑山はリンスの農田源行のコーヒー請負農の契約切れと共に職を求めてバウルーへ出てきていた青年で、彼は『聖報』社員第一号であった[21)]。

1921年11月には同じビラ・ファルコンのバウルー駅１kmに移転、駅情報の取材を遅くまですることができるようになっていた[22)]。さらに1923年、軌道に乗り始めた『聖報』社は、ビラ・ファルコンからバウルー駅近くのノロエステ街11番地に移転している。当時ノロエステ線沿線は、独立を目指す農民による土地買いが盛んだった。土地売りの広告料は通常広告料の1.5倍であったので、新聞社にとって絶好の収入源であった。この収入増大が『聖報』社の発展を支えていたといえよう。この頃、平野植民地の開祖平野運平の実弟榛葉彦平が、『聖報』の社員として編集を担当していた。香山以外に社員は畑山伸太郎、大山幸平、佐藤静、榛葉彦平の４名となった[23)]。

1923年９月14日、『聖報』は創刊100号目を迎えた。本来なら何らかの記念記事を掲載すべきところであるが、活字印刷のための活字を注文していた日本の販売所が関東大震災で灰燼に帰し、他の注文先を探さねば

21）『聖報』1931年９月７日第591号、創刊10周年の特別記事27面に写真掲載あり。

22）Mapa Bauru S. Paulo Brasil.Estação Ferroviária de Buru によれば、Vila Falçãoはバウルー駅南西部にあり、バウルー川沿いのソロカバナ鉄道沿線に位置する。ノロエステ街道との結節点で情報収集には好適地であったと思われる。ノロエステ街11番地は、現在のセントロに位置する。（インターネント検索2015年11月11日）。

23）伊丹金蔵編著『在伯同胞発展録』非売品、1931年、181頁。榛葉彦平は『聖報』社で１年半程編集をしていた。1930年ブラ拓チエテ移住地支配人、1939年トレスバラス支配人などの経歴を持つ。

ならない状態であったこと、さらには、震災被害で苦しんでいる幾百万同胞の不幸な記事類を記念すべき100号に掲載することは、人道的に差し控えたいとの香山の願望により、特別記事もない通常の4面紙を発行したにすぎなかった。香山らしい弱き者への思い遣りとも受け止められる。「本紙百号に就いて」と題した社説は「本紙百号記念は不幸であります。だが、忘れられぬ記念となるでしょう。」と締めくくっている[24)]。

しかし、この香山の社説を率直に受け入れるには疑問が残る。活字が届かないことと関東大震災での同胞への気遣いを最大の理由とすることで、実際は経済的裏付けのない無資本の小企業の無力さを、カモフラージュしていたにすぎなかったのではないかと詮索することもできる。1925年5月には、ジンコ版から活字への転換を契機に購読料の年払いを前金20ミル、後金23ミルと差を付けることで、購読者へ前金払いのお得感をほのめかし、購読者増大を狙っていたことが読み取れる。

『聖報』は1931年9月7日、創刊10周年を記念して、週2回（Bi Semanário）5,300部を発行するようになっていた[25)]。『日伯』や『時報』の週1回発行を尻目に、週2回ゼルマニア版で発行し、12月には1万部に達していた。さらに、サンパウロに本社を移転した後の1935年10月1日第993号から、工場拡張事業によりバウルーに分工場が開設されたことを契機に、週3回（Tri Semanário）発行するようになっていた。『回想録』396頁によれば、1936年10月から週3回発行と記されているが、発行期日を確認すればわかるように、1年もずれていることから、香山の記憶違いと見るべきであろう。

2. 内容構成

紙面構成はどのようであっただろうか。現存する『聖報』最古の紙面である1923年2月23日第71号で確認すると、基本的には4面構成であった。第1面は社説欄をトップに掲げて社主の姿勢を表現し、残りの紙面は広告で埋めている（図1）。その広告の内容はノロエステ地方の土地売りブームを反映したコーヒー栽培適地の分譲案内、田舎からバウルーに所用等で滞在する人たちのための旅館案内、ノロエステ線沿線の日本

24）「本紙百号に就いて」『聖報』1923年9月14日第100号第1面。

25）「尖端的報道機関として本紙は断然週2回発行」『聖報』1931年9月7日第591号第1面。

食製造所（醤油工場と醤油名）やリオデジャネイロやサンパウロの輸出入業者、横浜正金銀行リオデジャネイロ支店案内、時にはサンパウロ総領事館やバウルー領事館からの諸届の提出方法案内や海興の案内など、移民にとって生活上必要性の高い広告が中心であったことがわかる。

土地売り広告は、人の動きを察知してその情報を記事化するのに最適だったようだ。そのため『聖報』の記者たちは、バウルー駅前での情報収集には特に力を入れていたようだ。社屋を創刊当初のバウルー駅奥２kmのビラ・ファルコンからわずか半年で同地区の１km地点まで前進させてきたのは、時間をかけて駅情報収集量を増加させることと、刷り上がった新聞を、一刻も早く購読者に提供しようとした香山の、業務の機能性促進と移民中心の姿勢が突出していたからに他ならなかったといえよう。

第２面は海外電報や母国通信が中心で、移民たちは特に母国通信を楽しみにしていた。日本からの情報は、移民たちにはもっとも知りたがったものだけに、母国の新情報を的確に掲載することは、エスニックメディアとしての日本語新聞の生命線であったといえる。広告欄も生活必需品広告が紙面を賑わせていたことからも理解できる。広告欄の拡大は事業費獲得手段の外に、購読者自身に生活上への示唆を与えるものでもあったから、一石二鳥の効果を発揮していたといえよう。

第３面は地方欄で、ノロエステ地方はじめ各地の日本人会や青年会などの活動状況、人物往来、医者・司法書士・薬局案内、結婚・出産・死亡通知など、身近な生活情報が掲載されていた。例えば、1926年４月９日第224号に「去る７日午前10時、本社主宅香山谷子、７年目の出産、女の子分娩、母子共健在。」が掲載されている。この記事の内容から、香山の次女ジェニー秋子の出産時の記事であることがわかる。

第４面は教養欄で、読み物をメインに各種広告、後には短歌・俳句・創作詩など読者からの文芸作品が掲載されるようになった。文芸欄が充実したのは、それだけノロエステ地方の日本人移民社会が安定拡大し、購読者数が増加しつつあったことを示していたといえよう。このように、紙面の約半分は広告が占有してはいたが、日本人社会の変化も静かに表現していたとも考えられる[26)]。

26）『聖報』1923年２月23日第71号：記事全般。

第２章　地方紙『聖報』のアピールしたもの

第１節　移植民文芸の特化

『聖報』の使命は、移植民の新聞たることを忘れずにペンを執ることにあると香山が述べているように、生来、文学青年であった彼は、地方紙としての特徴を文芸に見出そうとしていたようだ。創刊初期は経済的基盤が不安定だったこともあり、文芸欄への投書者や寄稿者に原稿料が払えず、僅かに購読料と年賀状広告料を無料にするに留まっていたようだが、事情を知る仲間たちは協力を惜しまなかったというから、香山に対する移民たちの信頼性は高かったことがわかる。移民たちにとって、自己の文芸活動の表現場所を提供してくれるのであれば、金銭の有無は問題外だったのかもしれない。文芸欄投稿者には、上塚周平（瓢骨）、星名謙一郎、坂井田善吉（南州）なども名も連ねていた[27]。

新聞俳壇の先駆は、1916年創刊された星名の週刊『南米』、新聞歌壇の先駆は1920年６月の「日伯歌壇」とされている[28]。香山は『聖報』としての特徴を「俚謡」に見出した。熊本県出身の香山は、ノロエステ地方には同郷者が多いことにヒントを得て、彼らが日常親しんでいた熊本俚謡の掲載を考えついたと思われる。1931年９月11日第592号第４面には、『聖報』創刊10周年記念の特集記事として、文芸部が新たに設定した文芸欄への懸賞金付き募集記事が、同年９月15日第593号第４面には、「植民情緒豊かな俚謡正調を募ります」とした記載がある。すなわち、

> 本紙は10周年記念号を一期として此の欄を毎週約一段宛植民情緒豊かな〔殖民俚謡正調〕を募り掲げます。一等当選10ミル、二等当選５ミル、三等当選郵券代２ミルの賞を呈します。大和民族殖民文芸俚謡正調の玉成と大成を期する為であります。選者は当分公孫樹が担当致します。聖州新報文芸部。（略）平素は殖民俚謡正調一点張りで臨みます[29]。

27）ジェニー脇坂『原稿A』1962年：947頁。香山、1976年：376頁。

28）細川周平『日系ブラジル移民文学Ⅰ』みすず書房、2012年：297頁、308頁。

29）「植民俚謡正調」『聖報』1931年９月25日第596号第４面。公孫樹は香山のペンネーム。

七七七五調のリズムが美しい植民俚謡正調の一例を以下に掲げる。

我が家うしろに坂道上りゃ花も盛りの珈琲園　　高木臥牛
春か秋かも知らない顔で珈琲育てる十余年　　三澤妙珍

香山は『回想録』に「時事問題の他に文芸欄の俚謡が好きだった」と記している[30]。その背景には、日露戦争当時の不穏な時期に、郷里で耳にした『俚謡』が心和ますものであったことへの郷愁があったのであろう。彼はその思いを新聞の文芸欄改革で実現させたといえる。『聖報』1931年９月25日の記事には「聖報歌壇　公孫樹撰　植民俚謡正調」と記されていることから、香山は率先してその選者となっていたことがわかる。これらは彼の常に移民の立場に立つという姿勢の具現化ともいえ、1931年から32年に掛けて掲載された『聖報』の特化策の一つとなっていたと考えられる。

1933年10月、『聖報』は文芸欄に聖報俳壇・聖報歌壇を設け、移民の俳句や短歌を募集している。聖報俳壇は、日本俳壇の一派ホトトギスに属する佐藤念腹を選者としていたが、日本生活擬物句ばかりであることに香山は失望し、わずか１年余りで念腹俳句を閉じ、新しいブラジル俳句を創作する木村逝子に傾倒していった[31]。聖報歌壇は、日本歌壇を真似て日本の生活情緒を模擬したものではなく、日本移民のブラジル生活の香と色と味をその中に秘めた生命の表現そのものであり、1937年、それらを纏めて歌集『移り来て』が発刊された[32]。女性社員須田富美子（貞女）が選者で、その他の女性社員と女性投書家たちの努力が実って500部が刊行され、戦前期ブラジルにおける最初の歌集となった。1938年、サンパウロ州内の歌人が結集して短歌誌『椰子樹』が創刊されたが、この原動力となったのは『聖報』の植民短歌編集部の木村茅里選者と香山公孫樹であったと云う。これらから、『聖報』は日本人コロニア女性文芸の祖であったのではないかとの香山の論にも理解できるものがある。

30）香山、1976年：79頁。

31）ジェニー脇坂『香山六郎俳句集』私家本：46頁～47頁。

32）香山、1976年：387頁。ブラジル日本移民70年史編纂委員会『ブラジル日本移民70年史』ブラジル日本文化協会、1980年：254頁。

第２節　地元直結の新聞を強調：上塚周平と八五低資問題

1921年頭から上塚周平との関わりを断っていた香山は、９月に『聖報』を創刊したものの、その経営困難に直面していた。1924年、上塚の植民地建設も軌道に乗り分譲区画は完売していた。入植間もない移民たちは独立を急ぐあまり、次のコーヒー収穫予測をもとに高利の年賦払い資金を借り土地買いに焦っていた。ところが1923年末から天候不順となり、大洪水と旱魃、1924年６月の霜害、10月末の旱魃と、激しく変化する自然災害に彼らは完全に打ちのめされ、新聞各紙はこぞってその危機状態を書き立てた[33)]。

その頃の香山は、上塚を表面上先輩として付き合っていたようだ。あるいは新聞経営上、上塚の大衆的人気を利用しようとしていたとも思われる。同様に上塚も、香山のメディアネットワークを活用することで、自己の植民地開発を宣伝しようとしていたとも考えられる。

土地所有者でありまた土地ブローカーでもあった上塚は、1925年『聖報』へ「各駅における日本人土地所有面積等申出」というタイトルの記事を掲載し、各鉄道沿線の日本人移民に対し、救済請願のための調査を実施させ、田付七太特命全権大使に訴えた[34)]。この請願運動に参加したのはノロエステ線各駅の請願団と、ソロカバナ線アルバーレスマッシャード駅の星名健一郎の一団だけであったため、『日伯』や『時報』は、不平等な請願運動だと上塚や『聖報』を紙上で責め立てた。その典型例が『日伯』の「低資問題の経緯」と『時報』の「同名異質の低利資金」シリーズである。すなわち、『日伯』は「低資問題の経緯」と称して同年４月中に４回シリーズで批判文を掲載し、『時報』は「同名異質の低利資金」と称して同４月中に３回シリーズで是々非々文を掲載していた。これらの批判に対して『聖報』は、中央紙に動じることなく逆にそれらの反論をバネにして詳細な情報を掲載し、地元の購読者に冷静に判断・行動することをアピールしていた[35)]。

---

33)「旱害」『聖報』1923年12月14日第112号。「霜害予防は刻下の大急務」『時報』1924年５月９日第343号。「ソロカバナ線と田付大使」『聖報』1924年５月23日第134号。

34)「各駅に於ける日本人土地所有面積の申出」『聖報』1925年７月10日第186号第３面。

35)「低利資金の請願成就と植民の覚悟」、「低利資金について」『聖報』1926年４月16日第22号第１面および４月23日第226号第１面。

この事例は地元有力者であった上塚と協力し、地方紙の威力を如何なく発揮させたものであり、ノロエステ地方日本人移民の結束力・決断力の強さを中央に向けて示した好例であったと思われる。また、これによって『聖報』は、ヒト・モノ・情報すべてが活気づいた地方紙としての基盤を確立していったともいえる。1926年３月末、日本政府はこの請願運動に対し、「珈琲旱害被救済者低利貸付資金」85万円の貸付を決定した[36]。所謂「八五低資問題」である。同年末から対象となったノロエステ線各駅とソロカバナ線の一部に資金が振り分けられた。なお、この「八五低資問題」は別稿にて研究中であり、詳細については今後発表の機会を作りたいと考えている。

第３節　年鑑類の発刊

香山は単に新聞人に留まらず、ノロエステ地方の日本人の活動を『聖報』社と共に３種の年鑑にまとめ発刊している。すなわち『のろえすて日本人年鑑』（1928年）、『ノロエステ・ソロカバナ・パウリスタ三線邦人年鑑』（1930年）、『在伯日本移植民二十五周年紀念鑑』（1933年）である[37]。年鑑作成に当たっては、『聖報』社内に「年鑑部」を置き、調査は社員、出張社員等を総動員して、移住地をくまなく歩く悉皆調査であった。いわゆる「足で稼いだ」年鑑であり、その購読者もノロエステ線ばかりでなくソロカバナ線・パウリスタ延長線沿線各駅に存在していた。特に『在伯日本移植民二十五周年紀念鑑』の編纂に当っては、前述の２つの年鑑以上の盛り上がりが社員間にも広がっていたようで、『聖報』紙上には、サンパウロ州内の開拓鉄道全線に社員の出張を知らせる「社告」と「社員募集」が頻出していた[38]。発刊時には、主要駅に代表者や代表機関を設定し、まず彼ら宛に大量に発送し、そこから周辺地域の購

36）「第51回帝国議会衆議院予算委員会議録（速記）」第17回（1926年３月19日）および第19回（同月22日）に経緯と決定事項掲載あり。

37）『在伯日本移植民二十五周年紀念鑑』の「紀念」の文字であるが、実際の本の背表紙と表紙、奥付で表記が異なっている。筆者は香山が序言や新聞紙上で使用している「紀念」を尊重し、その漢字を使用することとした。『のろえすて日本人年鑑』の表記も同様である。

38）1931年から32年末にかけて巡回員として社告に掲載された人物には、中村健兒、壷内一、伊丹金蔵、山下寛人、遠藤直治、岡村勇弐、港盛吉、駒井重俊、矢田部亮一などがいた。また、社員には伊丹智津枝、中村豊子、安楽岡美津子など女性の採用もあった。

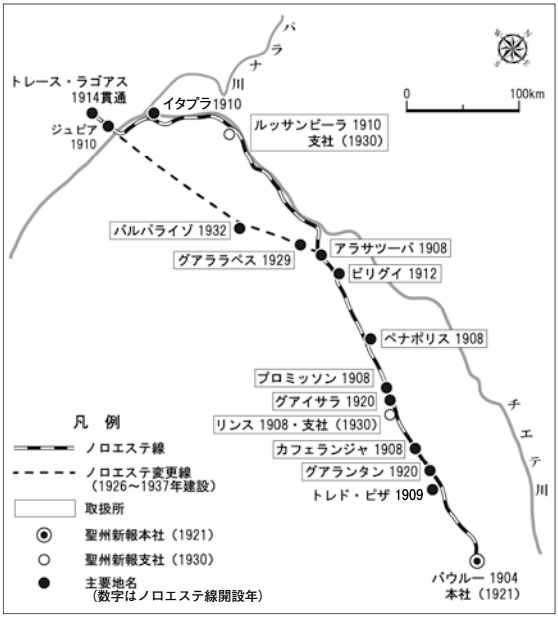

図２　ノロエステ鉄道沿線聖州新報取扱所分布図（1934年）

Caio SHIOMI：*DAITAN NA*（勇気のある者）。AACEA, ACNBG. 2008年63頁より筆者作成。
（注）1908年建設のエイトール・レグルー駅は、1921年プロミッソン駅と改名。

読者が受領できる流通システムを整えていた。1934年９月28日付『聖報』によれば、上記３つの鉄道沿線に少なくとも21個所の配本所を設定し、その配本所には個人だけでなく青年会や日本人会も協力していたことが記されている。香山と『聖報』の社員たちは、地域住民と一体となって新聞・年鑑事業を推進していたのだ。例えばノロエステ沿線には、ノロエステ変更線の一部を含めて当時53の駅が設置されていることになっているが、すべての駅に『聖報』の取扱所が設定されていた訳ではなく12駅のみであった[39]。これは駅とは名ばかりで、掘っ立て小屋程度の駅舎やアカンパメント（acampamento：野営地）などがあるだけで、日本人住民が存在しないか、『聖報』を必要とする日本人がいないことによるものと思われる（図２）。地域住民と一体化して行動をすることができるのは、地方ならではの優位性であり特徴であったといえるのではないだろうか。

これらの年鑑発刊は、他社に劣らない成果として評価されるべきものである。また、1933年６月刊行の『時報』社の『ブラジル年鑑』と共に、

39）「社告」『聖報』1934年９月28日第897号によれば、バウルーを含むノロエステ線12駅以外では、ソロカバナ線５駅（プ・ベンセスラウ、セルケーラ・セザール、モンソン、アヴァレー、バストス）、パウリスタ延長線４駅（ベラクルース、ポンペイア、ドアルチーナ、マリリア）であった。

戦前日本移植民の生活状況を理解するうえで、今日の移民史研究にも不可欠な史料となっている。したがって、それらの著作・編纂・発刊に関与してきた香山の功績は、歴史的に高く評価されるべきものであると考える。香山は『回想録』の中でこの３つの年鑑に共通した特徴として、調査者名欄に家長名だけでなく、主婦の名前も表記したことだといっている。移植民生活における主婦の役割は、家長と半々であるからだというのがその理由であった[40]。移民の苦労を妻のタニと共に体験してきた香山らしい着想であったと考えられる。

第３章　聖州新報の発展と廃刊（サンパウロ時代）

第１節　サンパウロ市への進出

1930年10月、ブラジルにジェツリオ・ヴァルガス革命が勃発した。11月にヴァルガスが政権を掌握すると、多民族による国家を統合するため、国民国家の建設を目指した新国家体制（Estado Novo）を打ち出した[41]。当時の日本国内は、世界大恐慌の波及による経済困難状態に陥っており、日本国政府はブラジル移民に対し、渡航費補助以外に、満12歳以上には渡航準備金（50円）をも支給するなどの対応策を打ち出し、ブラジル移民は年間２万人を超す勢いだった。

1934年７月16日、ブラジル政府は「1934年憲法」を公布し、同憲法第151条補頁第６号により「外国移民二分制限法」を公布した[42]。過去50年間の移民数の20％に入国を制限するもので、日本の場合、過去の入国数124,457人により、その割り当て数は2,489人と算出された。また、同憲法第151条補頁第７号で「移民の集中の禁止」も公布した。移民の集中は、ブラジル連邦領土の何れの地点においても之を禁ず。というものであった。

一般に、日本人移民の減少を「移民二分制限法」に限定する解釈が多いが、香山はそうではなかった。同法補項第７号の方が、既にブラジル

40）香山、1976年：370頁。

41）亜米利加局「４　新憲法ノ特徴」『第67会帝国議会説明参考資料1934年（以後『議会調書』と略記）』323頁、帝国議会関係雑件説明資料関係（通商局）、第一巻（調書）、Ａ－５－２－０－１－３。

42）香山編・発行『移民40年史』1949年：427頁。この件に関する書籍は多数存在する。

に生活基盤があった一世を拘束するのである。ノロエステ地方内の日本語新聞を必要とする一世の移動が制限されるということは、新聞需要の減少をも意味することを香山は察知していたのではないかと考える。この移民数の激減と一世の移動制限は、日本語新聞の購読者減少につながる一大事であった。香山のノロエステ地方からサンパウロへの進出の背景には、このようなブラジル政府の動きを察知した香山の的確な判断があったと考えるべきではなかろうか。

しかし、これらの察知事項を香山は伏せて、バウルーでの業務上の地理的・物理的マイナス条件を指摘したのみで移転決心を公言した。この点に香山の将来的知見の鋭さを見る。すなわち、需要増大に対応できる紙屋や写真版製作工場の不在と、緊急時の印刷関連部品類の注文上の時間的ロス。さらに、移民のニュースもノロエステ・パウリスタ・ソロカバナ三線の生活情報取材だけでは、在ブラジル日本人全般からの購読者獲得は難しい。時代のニーズに合わせるにはラジオの利用は不可欠だが、修理屋の不在は情報収集に不便をきたす。日本国内の情報量が増大する現実を受け止め、邦人の発展と共に新聞も日刊紙にまで変換して行かねばならないなどを掲げたにとどまったのであった。

1934年11月13日、『聖報』はサンパウロ市へ進出した[43]。社屋はタバチンゲーラ街96番地。新聞名もNotícias de São Pauloと改名。週２回発行とし、創刊第905号目がサンパウロ発刊第１号となった。この本社移転を案内した同年10月23日の『聖報』第904号には、時代の趨勢を認識し、日本国内の情報量増大に伴う週２回発行の必然性、新聞条例による行政区移転時の新聞名の新たな登記、社長をブラジル人としなければならない理由、移転に伴う購読料金および広告料金変更なしなど詳細が記載されている[44]。この社屋には営業認可が下りなかったため、一カ月後、アセンブレア街16番地に移転している。サンパウロ市の中心街で、セ教会やブリガデイロ・ルイス・アントニオ通りのサンパウロ総領事館にも近接していた[45]。

1935年、香山の長男夫陽が日本に留学した。夫陽は早稲田大学を２年

43）人文研『日本移民・日系社会史年表』人文研、1996年：78頁。香山、1976年：379頁。

44）「社告」『聖報』1934年10月23日第904号第１面。

45）「社告」『聖報』1934年12月11日第912号第３面。詳細な地図入りの社告である。

で修了後、熊本第６師団歩兵13連隊に入隊している。その時の様子を『聖報』1938年12月28日第1678号第４面は「日本男児此処に在り、挙る二世の意気、香山夫陽君勇んで応召」のタイトルで大々的に取り上げていた。夫陽が在学中「東京ラジオ」の通信員となったことを契機に、『聖報』社は母国ニュースを一手に報道するラジオ部を設置した。東京ラジオ通信を開始すると購読者数は１万人と倍増した[46]。1935年７月９日第968号の上塚周平を悼む従弟の上塚司代議士の言葉「今日の発展を見て満足であろう」の中に「東京ラジオ８日」の記入があり、香山夫陽の東京通信であったことを示している。『聖報』はバウルー生まれの田舎新聞を自負しつつも、都会派新聞へと自らの力で脱皮したといえよう。

1937年８月23日第1279号から日刊紙（Um diário）へ移行している。この移行は中央紙２紙に先駆けて実施されており、東京ラジオ通信以来『聖報』の情報伝達量の多さと、その俊敏なる伝達のための工夫と努力が具現化されたとみることができる。

日本語通信を開始したことで、『日伯』は『聖報』への商売怨恨からか、聖報編集部の切り崩し作戦を始めた。すなわち、編集長であった内山勝男と活字部の田中三郎が日伯に引き抜かれてしまったのだ。この『日伯』による『聖報』切り崩し作戦は三浦らしい策略であったが、香山はそのことを何ら問題にしなかったという[47]。

第２節　新聞紙条例への対応：二世社長とポルトガル語版の挿入

1931年８月、ブラジル政府は１月に公布した失業対策としての移民制限令に続いて「改正新内国人雇用令」を公布した。個人、企業団体、組合、会社は雇用従業員中職分の如何を問わず、３分の２のブラジル人を使用する義務があるといった内容のもので、ブラジル人労働者の優先的保護を表明した労働政策であった[48]。さらに第67会帝国議会説明参考資料1934年（以後『議会調書』と略記）によれば、二世社長擁立の根拠となった新憲法131条には以下のようなことが記されていた。

46）「ブラジル移民の父上塚周平翁逝く」『聖報』1935年７月９日第968号第３面。香山、1976年：396頁。

47）香山、1976年：395頁～396頁。

48）「３分の２は伯国人を使え」『日伯』1930年12月18日第702号第２面。移民70周年編纂委員会『ブラジル日本移民70年史』ブラジル日本文化協会、1980年：73頁～77頁。

新憲法ハ（略）、（三）無記名株券株式会社及外国人ハ政治的若ハ報道的新聞業ヲ営ムコトヲ得ス、此ノ種法人及外国人ハ右事業ヲ経営スル株式会社ノ株主タルコトヲ得ス、又政治的若ハ報道的新聞ノ主要責任及智的事務的統制ハ生来ノ伯國人ノミ之ニ当ルコトヲ得（略）。右ノ中最モ重要ナルハ自由職業、新聞業及外国語教育ニ関スル規定ナルガ其本邦人ニ及ボス影響ノ範囲ヲ考察スルニ概要左ノ如シ（略）。（二）新聞業規定の結果伯国ニ於ケル新聞社ノ社長、主筆、編集主任等ハ生来ノ伯国人タルコトヲ要ス[49]

外国人による政治的・報道的新聞業営業の禁止、その企業の責任者や事務統制者、さらに新聞社社長、主筆、編集主任などは、生粋のブラジル人でなければならないことを規定したものであった。香山は法律遵守の建前から、サンパウロに移転した時点で社長を養女橋口静子の夫のブラジル人ダリオ・P・アルメイダに変更し、香山は発行人となった。同年11月13日の『聖報』サンパウロ第１号紙（通算905号）には「NOTÍCIAS DE SÃO PAULO, Director:Dario P Almeida, Proprietário:Rocro Kowyama」と記載されている。しかし、ダリオはこの仕事にあまり興味を示さず、1939年、成人した香山の長女露子にその席を譲ってしまった[50]。露子は廃刊になるまでその職を全うした。移転当時の『聖報』社員は23人にも増加しており『聖報』社の隆盛期であったといえよう[51]。

ポルトガル語の挿入に関して、ヴァルガス政権下での新国家体制建設は進み、日本人移民たちには次第に生活しにくくなってきていた中で、『聖報』にも徐々にポルトガル語表記の記事が散見されるようになってきた。ブラジル国内では、特に外字新聞（ポルトガル語以外の言語で書かれた新聞）に対するポルトガル語記事の掲載の厳しい糾弾が始まっていた[52]。その結果『聖報』も1939年９月21日第1957号から第１面の６分

49）亜米利加局『議会調書』1934年：325頁。

50）『聖報』1939年９月25日付第1959号第１面。

51）香山、1976年：383頁。リベルダーデ区アセンブレア街363番地の聖州新報社前での記念写真の掲載あり。

52）1939年７月20日付、桑島大使より有田外務大臣宛、第133号。外務省「各国に於ける新聞雑誌出版物取締関係雑件伯国の部」単巻A－３－５－０－６－16。以後、「新聞取締関係」と略記す。

の１程度がポルトガル語の記事欄へと変更された。1941年１月からは第１面は完全にポルトガル語版となり、第２面が従来の第１面の機能を持つようになった。この体制は『聖報』廃刊時まで変わらなかった。

第３節　廃刊の決断

1937年７月18日、ブラジル新体制が外国語（日本語）学校の禁止や日本語新聞・雑誌発行禁止令を打ち出した頃の日本人社会では、その規制をさほど深刻には受け止めておらず、『日伯』・『時報』・『聖報』の主要日本語新聞は、むしろ日刊紙への転換を進めていたほどだった。同年７月７日、日支事変が始まったため、その詳細を購読者に届けるには週２回発行では補えなかったのだ。特にラジオニュースを新聞情報に取り込んでいた『聖報』は、同年８月23日、中央紙３社の中でいち早く、しかも突然、日刊紙へ移行した（第1279号）。『時報』も同日、日刊紙へ移行している（第1376号）。

この突然の日刊紙移行も新聞各社の購読者獲得競争の戦術の一つであったと思われる。『聖報』の場合、1932年当時から常にリオデジャネイロ通信を掲載しており、首府情報獲得手法は他紙より優れていたようだ。『日伯』は他の２社に出遅れて同年８月25日（第1187号）から日刊紙へ転換した。『聖報』がいち早く日刊紙に転じたことからも、サンパウロ進出を果たして更に発展を遂げていた『聖報』の市場戦略が読み取れる。また、ヴァルガス新体制下で、むしろ日本語新聞は当時の日支事変の戦況など多くの紙面を割いて報道するなど、日本の情勢を伝達しなければならない使命があったため、新聞社間の熾烈な情報作戦が展開されていたのだった。

一方、ブラジル政府は枢軸国新聞の検閲、主要記事へのブラジル語添付義務、ブラジル語欄の併設指示など次々と規制を強めて日本語新聞を廃刊へと追い詰めていった[53]。『聖報』はこれに抵抗しようとしたのか、『聖報』発行人は露子であったはずが香山六郎と書き換えられ、新聞社住所欄は消されたりしていた。また1939年９月25日第1959号から突然、住所欄にコンデ・デ・サンジョアキン街93番地と表記され、発行人は再び香山露子（Celina Kowyama）と書き換えられたりしていた。ヴァル

53）1939年７月20日付第133号。外務省外務省「新聞取締関係」A－３－５－０－６－16。

ガス政権下での外国語新聞・雑誌への規制策が厳しくなる中で、新聞の継続を願うが故の混乱であったと判断できよう。1941年５月、ブラジル政府は正式にブラジル国内の外国語新聞・雑誌等の発行禁止令を公布した[54]。

この間、外務省と在リオデジャネイロ日本大使館の間では、移民の混乱を想定し、ポルトガル語に日本語訳を付することなどを掲げた廃刊延期願をヴァルガス大統領に請願するなどの善後策を講じていた。一時は枢軸国側の要請を受け入れた形で同年度末中の延期も考慮されていたが、30日間の延期に留まってしまった[55]。そこで外務省は、関係新聞社に対して８月31日以降ポルトガル語版が発行できるよう準備を進めることを促していたが、日本語版廃止以後の在留民に対する報道方法については研究中としただけに留まっていた。この外務省と在リオデジャネイロ大使館の対応に対しアメリカ系新聞「ザ・ニュース」は、「今回の措置により最も困るのはポルトガル語を解せぬ日本移民であろう」と皮肉った見方をしていた[56]。

『聖報』は即刻この状況を報道することはなかった。紙面には欧州戦線やアメリカと日本の緊迫状態の報道が溢れていた。さらにブラジル在住日本人有志達による「母国出征軍人慰問団」なるものが結成され、５カ年の月掛献金を募っていたほどであった[57]。このことから、ブラジル日本人社会には迫りくる緊迫状況を何等疑う気配はなかったといえよう。しかし香山は『在伯日本人の行方』と題した日本回帰論を３回シリーズで掲載し、『同化は日本民族意識の退化だ。東亜に帰ることが民族的道徳だ』と論じたのである[58]。メディアとしての公正報道をしたつもりなのか、本人の本音なのか、或はブラジルの日本人排斥論へのポーズであったのかは不明であるが、香山は先を見越した何らかの暗示を日本人移民に与えたかったのではないかと推測する。

結果、日本語新聞はすべて同年中に廃刊もしくは休刊を余儀なくされ

54）1941年５月30日付第178－１号。外務省「新聞取締関係」Ａ－３－５－０－６－16。

55）1941年５月30日付第178－１号。７月14日付第255号。７月17日付第267号。７月31日付第305号。外務省「新聞取締関係」Ａ－３－５－０－６－16。

56）1941年８月２日第314－２号。外務省「新聞取締関係」Ａ－３－５－０－６－16。

57）「母国出征軍人慰問団」『聖報』1941年７月12日第2231号。

58）「在伯日本人の行方（３）」『聖報』1941年７月12日第2231号。

たのだった。『聖報』も同年７月30日、香山による「廃刊宣言」を掲載している[59]。香山は社屋と印刷機械類の整理にかかり、その売却益で社員に最後の給料を支払っている。『聖報』を最後まで支えてきた社員は、営業部の小林清松・八重子夫妻、活版部の大谷姉妹、編集部の園田新など14名に減っていた[60]。

1942年１月28日、日本とブラジルの国交断絶により、日本移民を母国と結び付けてきた大使館、領事館、商社、移民会社などは閉鎖され、外交官や企業の駐在員他370余名が交換船で帰国してしまった[61]。ブラジル国内に日本人社会を構築してきた日本移民は、ブラジルの敵性外国人として残されてしまったのである。棄民意識（キスト）はここから増幅されていったと考えられる[62]。

1945年８月15日の終戦宣言のラジオ放送を聞いた翌日、香山は今まで発行してきた新聞すべてを、息子の夫陽と敏信に手伝わせて、自宅裏庭で焼却処分してしまっている[63]。貴重な歴史資料はいとも簡単に灰燼に帰してしまったのである。

第４章　戦後の香山の動向

第１節　著作への執念

終戦後、香山は昔の新聞仲間からの誘いを受けて、長男の夫陽と共に新設された新聞社を訪問している。しかし、釈然とせず新聞界には関与しなかった[64]。香山には新聞を再刊する資本もなかったから、新たな未来を文化活動に求めていたようだ。

研究欲旺盛な香山は、1949年には仲間の支援を受けながら『移民四十

59）「廃刊の辞　香山六郎」『聖報』1941年７月30日第2236号。『ブラジル日本移民70年史』77頁に写真掲載あり。

60）香山、1976年：398頁。

61）日本ブラジル交流史編集委員会『日本ブラジル交流史』日本ブラジル中央協会、1995年：70頁。

62）キストは、ヴァルガス政権の新体制から発生したといわれている。

63）香山、1976年：398頁。

64）ジェニー脇坂「パウリスタ新聞社屋新築落成」『原稿Ａ』1962年：1567頁～1569頁。

年史』を、1951年には『ツピー語単語集』も発刊している[65]。しかし、この最も楽しく研究していた項目について、『回想録』には、わずか１頁しか記述されていない。『原稿Ａ』では10頁に亘って詳細に記述されており、『回想録』が香山の思いを十分に伝えていないのではないかとの疑問が残る。戦後の香山の活動を知る重要な手がかりは、この時点で『回想録』から抹消されてしまっていたのだった。

1953年４月28日頃から両眼を患い治療を受けたが、逆に症状を悪化させ両眼とも白濁して盲目となり、さらに治療ミスによって聴力も失い盲聾者となってしまっていた[66]。

1956年、70歳の香山は、笠戸丸出帆48年目の記念日に『回想録』の執筆を開始している。ある日の香山の作業予定を残存する筆跡コピーから確認すると「今日のプログラムマ　十二月十一日」とあり、３つの作業内容が箇条書きされているが、一般人にはほとんど読めない筆跡である[67]。これを関係者たちは「香山象形文字」と呼んでいたようだ。

盲目になっても書き続けたのが、今日の『回想録』の原本である。香山にとって『回想録』は香山自身の50年史である。香山は50年史を書く際「移民史は労働史だ。真の闘争史だ。俺はありのままの歴史を、自然物の闘争史を書こう。」と決心している[68]。凄まじいばかりの闘争心を掻き立てていたことが十分に伝わってくる名言である。

第２節　香山とその家族

『原稿Ａ』で50頁分ほど削除されていたのは、家族や友人たちとの思い出や教育普及会の部分であった。『回想録』では、ブラジル時代の香山と日本の親族との通信は、幼少時の後見人であった土屋員安叔父がロンドンからあてた手紙の一文しか記述されていない[69]。しかし、『原稿Ａ』には、米姉と俊雄兄が戦後台湾から帰国し、姉の米が82歳の時、癌で死

65）ジェニー脇坂「ツピー語の研究」『原稿Ａ』1962年：1553頁～1564頁。香山、1976年：434頁～435頁。

66）ジェニー脇坂『原稿Ａ』1962年：1501頁～1505頁の「体調の崩れ」が香山、1976年：435頁～437頁では「盲目」というタイトルで書き直されている。

67）香山、1976年：表見返し挿入写真「筆者の筆跡」。

68）ジェニー脇坂『原稿Ａ』1962年：1392頁～1395頁が香山、1976年：434頁に該当する。

69）香山、1976年：282頁。

表２　香山六郎の家族（1958年現在：笠戸丸移民50周年記念時の状況）

番号	親子関係	子・配偶者	孫・配偶者	曽孫	誕生	その他
1	戸主：香山六郎				1886/１/５	1913年11月結婚、1976年４月６日死亡（享年90歳）
2	妻：　タニ				1882/７/11	1913年11月再婚、1973年11月２日死亡（享年91歳）
3	養子１	敏信			1903/８/２	熊本県天草郡深海村生
4	配偶者	鶴子				日本人
5	孫（女）１		ラウラ一枝			
6	孫（男）１		敏雄			
7	孫（男）２		敏政		1942/０/０	双生児１
8	孫（男）２		敏幸		1942/０/０	双生児２
9	孫（男）３		智俊			
10	養女１	ローザ芳子			1908/10/14	ノロエステ線サンジョアキン植民地生
11	配偶者	ウイリアム・ジョネス				イギリス人
12	孫（男）１		W・J・重政			
13	配偶者		ノルマ			イタリア系ブラジル人
14	曽孫（男）			W・J・３世		
15	孫（女）１		メリー			
16	孫（女）２		テドリ恵子			
17	養女２	フランシスカ静子			1911/１/21	リオデジャネイロ州イグアッペ植民地生
18	配偶者	ダリオ・P・アルメイダ				ブラジル人
19	孫（男）１		ドルバル敏信			
20	孫（男）２		ジゼウ			
21	孫（女）１		エレーナ・ミドリ			
22	配偶者		セジオ			スペイン人（カナリア島）
23	曽孫（男）			セジオ・セグンド		
24	長女	セリーナ露子			1914/12/00	サンパウロ生。1944年結婚
25	配偶者	尾関興之助				日本人
26	孫（女）１		稲子		1942/０/０	
27	孫（男）１		ハジメ			
28	長男	夫陽			1917/２/25	ソロカバナ線第１モンソン移住地生。1941年結婚
29	配偶者	実子				日本人
30	次男	エイトール			1918/12/00	ノロエステ線エイトール・レグール植民地生。1943年結婚
31	配偶者	季子				日本人
32	孫（女）１		アリセ美保		1944/０/０	
33	孫（女）２		モエマ・アケミ			
34	孫（男）１		エイトール・J・以和男			
35	孫（女）３		エレニーニャ			
36	孫（男）２		功			
37	配偶者		日系伯人女性			
38	次女	ジェニー秋子			1926/４/７	パウルー生。1954年８月結婚
39	配偶者	脇坂勝則				日本人
40	孫（女）１		ターニャ		1955/０/０	

香山『回想録』およびジェニー脇坂『清書原稿A』、ジェニー脇坂へのインタビュー等より筆者作成

亡したこと、肺結核を患う兄からの依頼で日本では購入できない高価なアメリカ製結核治療薬を送っていたが、その兄も79歳で死亡したことなどが詳述されている[70]。この事例から、『回想録』からは読み取れなかった香山の日本の親族との情報交換はされていたことがわかった。香山の日本脱出原因が徴兵忌避であったことから、結果的に一度も帰国することはなかったのだが、香山は日本への一時帰国にもこだわり、逆にそのこだわりが、日本との通信を欠かさなかったことに繋がっていたのではないかと考えられる。

香山は妻タニの夫であった故橋口重正の３人の遺児を自分の子供同然に育てあげていた。特に長男の橋口敏信は、香山と共に『聖報』に最後まで関与した香山にとっても最も心強い協力者であった。長女ローザ芳子と次女フランシスカ静子は、日系人以外の男性と結婚している。その２人の結婚には香山も妻のタニも不満があったようだが、その他香山の４人の子供と敏信は、日系人と結婚しており、香山にとって喜びであったようだ[71]。「日本回帰論」を唱えていた香山らしい姿と捉えることができよう。

香山には常に周囲に同調者が存在し、周囲から香山を支えていたという点で、人間関係の広がりや膨らみを感じさせるものがある。『回想録』を書き終えた1958年現在、香山の家族は子供７人と孫19人曽孫２人の大家族になっていた（表２）。これらについて香山は「私は財産は積んでいないが、子供や婿の精神的資源はもっている」と述べている[72]。

香山は社員の人格も尊重していた人物と捉えられる。社員との険悪なイメージは、『回想録』を読む限りにおいてはほとんど表出しない。『日伯』三浦が香山の『聖報』発刊に当って「蝶々トンボも鳥のうち」と徹底的に揶揄した時も、香山がサンパウロに進出してきた時の『聖報』壊滅作戦で社員２人を引き抜いた時も激怒しなかったところに、常に社員を信頼し、社員との一体感を共有する姿勢を崩さなかった香山像を見る[73]。

70）ジェニー脇坂『原稿A』1962年：1543頁～1546頁。

71）ジェニー脇坂「秋子の結婚」『原稿A』、1976年：1547頁～1553頁。

72）ジェニー脇坂「吾児等の成長」『原稿A』、1976年：1007頁～1114頁。

73）香山、1976年：322頁。

おわりに

香山がノロエステ地方に『聖報』を立ち上げた理由の根底にあったものは、香山自身の「ひたむきさ」であったと纏める。如何なる誹謗嘲笑も心の奥に押し込め、新聞へひたむきに情熱を傾けていたことが、同じ辛苦を積んできた移民たちに共感と賛同を得て受け入れられていたからだ。地方紙としての特徴を持たせるために、俚謡など移民にとって身近な生活の歌を文芸欄に掲載し、八五低資問題では、地域住民と一体化して行動できる、ノロエステ地方日本人の結束力をアピールしていた。この移民の目線で移民に情報を提供しようとする香山の姿勢が、エスニック・マイノリティとしてブラジル社会に生き続ける人々に受け入れられたことは、香山の本望ではなかったか。

サンパウロに進出する際は、社会の趨勢を鋭く捉え、本音を見せずに達成していた。戦後新聞を再刊しなかった理由は意外に簡明で、将来を見据えた楽しい人生計画をクリアしたかった事にあったことも判明した。

香山をそこまで駆り立ててきた背景には、家族の存在の重みが感じられる。家族愛、社員愛、同胞愛の存在とその全てに通ずるものは、清谷が発したように「青年のようなひたむきさ」であったといえる。1973年11月２日、香山の妻タニが91歳で冥界入りし、1976年４月６日、香山も90歳で死没した。その香山の告別式に、ジェニー秋子の夫である脇坂勝則が「あなたはいつも頑ななまでに移民であることに固執しました[74]。」と弔辞を述べたといわれているが、この一文にこそ香山の人間性が高く評価され凝縮されているといっても過言ではない。

しかし、『回想録』には、「原稿Ａ」の肝心な家族愛や同胞愛の部分が大幅に削除されていたことが明確となり、『回想録』は、香山の闘争心を持って書き終えた労働史としての自伝の価値を減殺した作品となってしまったと言わざるを得ない。2014年の拙稿で投げかけていた疑問、すなわち、『回想録』の自伝としての限界は存在することを証明してしまったといえよう。このように断言できたのも『原稿Ａ』を分析した結果である。なお、今回追究できなかった戦後の香山の文化的活動に関しては、今後の研究課題としたい。

74）香山、1976年：まえがきⅠ頁。

本研究を通して、他者とは異なる経験の持ち主であることを自己容認しつつ戦前は『聖報』発刊に、戦後はブラジルに骨を埋める覚悟で、文化活動と香山50年史作成にひたむきに全精力を傾けていた移民知識人香山の、純粋で誠意ある新聞人としての真の姿を発見した。第１回ブラジル行移民船笠戸丸の自由渡航者であった香山こそ、ブラジル日本語新聞発展の礎となった、ノロエステ地方のピオネイロ（Pioneiro：先駆者）であったと信じて疑わない。

謝意

本論記述に当って、「原稿Ａ」の写真撮影やバウルーの地図探索などに関しては、ブラジル・サンパウロ在住の尾身千枝子氏・伊東信比古氏、外山脩氏等のご協力を得た。また、故香山六郎の次女であるサンパウロ在住のJenny Wakisaka氏（90歳）からは、史実確認と資料提供をして頂いたばかりでなく「あなたを信じます。父も喜んでくれるでしょう」との温かい言葉を頂くことができたことは、私の心の励みとなった。末筆ではありますが、坂口教授並びに関係諸氏のご厚意とご指導・ご協力に対し心から謝意を表します。

【参考資料】 香山六郎・ブラジル日本移民関係年表

西暦	元号	月日	香山・聖州新報関係	典拠	日本・ブラジル関係史、世界情勢	典拠
1882	明15	7月11日	村崎タニ熊本県天草郡深海村字下平で誕生。	脇坂（イン）		
1886	明19	1月5日	熊本県玉名郡高瀬町にて父香山俊之・母伊喜の次男として香山六郎誕生。兄弟は長姉志乃、次姉米、長男俊雄の4人。両親は当時「松ノ屋」という田舎宿屋経営。父親は細川藩士の末裔。父の代に平民。	回想（11）『肥後』（藩士名） 渡航（非移民）		
1888	明21	4月	父の福岡県庁官吏の為、福岡市東中津に移転。以後、須崎町、天神町と移転。	回想（12）		
1889	明22	11月15日			ブラジル共和国宣言。	ブ全（340）
1890	明23	10月5日			ブラジル政府、法令第97号により支那及び日本移民の受有入国許可。	25周(2,595)
1891	明24	8月2日	母伊喜病没。福岡市内の薬院町、上通町と移転。	回想（22）		
1892	明25	4月	福岡県立師範学校附属小学校1年入学。父の再婚・退職で若松市転住。同市内の小学校1年転入。	回想（24－25）		
1893	明26	3月－4月	父の失業、小倉の篠崎村に移転。	回想（26－28）		
1894	明27	8月	父離婚、父親と熊本春竹の叔父宅へ。長姉志乃結婚。	回想（35－36）		
1895	明28	4月	熊本市広町瀬台尋常小学校3年入学。	回想（43）		
		11月5日			日伯修好通商航海条約調印。1897年2月22日公布。	交流（26）25周（2）
1897	明29	4月	春日村に転居。春日尋常小学校4年転入。	回想（45）		
1897	明30	8月23日			リオ・デ・ジャネイロ州ペトロポリスに日本公使館開設。初代代理公使兼総領事珍田捨巳。	官僚（51）25周(3,595)
1898	明31	3月－4月	飽田高等小学校入学。九州日日新聞の活字工。兄と本山尋常小学校に寄宿し託摩高等小学校通学。	回想（47－50）		
1899	明32	4月	京都一中校長土屋員安叔父の後見により兄と上洛。中立売高等小学校3年入学。	回想（54）		
1900	明33	4月	中立売高等小学校3年修了し、京都第一中学校入学。	学友（129）		
		12月12日	父香山俊久、八代で死亡。	回想（53）		
1902	明35	3月			イタリア政府、サンパウロ州政府渡航補助によるブラジル行契約移民の渡航禁止。日本移民導入の直接的契機。	年表（21）
1903	明36	8月	熊本濟々黌入学。保証人は同校校長井芹経平。	回想（81）		
1904	明37	2月6日			日露戦争（～1905年7月31日）。	年表（21）
		3月	濟々黌修業試験落第。員安叔父の激励で再奮起。	回想（85）		
1905	明38	3月	中位の成績で濟々黌5年進級決定。	回想（91）		
		7月	海軍兵学校試験不合格。人生設計上の番狂わせ。	回想（91）	ソロカバナ線バウルーまで開通	ブ全（450）
1906	明39	3月	熊本濟々黌卒業。陸軍士官候補生不受験。	濟黌（71）		
		3月27日			水野龍チリ経由で鈴木貞次郎と共にブラジル入国。	40年（20）25周（3）
		7月16日			後藤武夫、明穂梅吉、安田良一、隈部三郎等相継いでサントス・サンパウロへ到着（～10月21日）。	25周（5）年表（23）

		8月	叔父の大陸進出是非論に疑問を持つ。日記事件で叔父から勘当され京都を去り、東京で太田力男（後の関力男）と関当純家に同宿。	回想（101）		
		8月	日本大学大学部商科附属殖民科在籍。	日大（525）		
1907	明40	1月30日			ブラジル新移植民法公布	発展（265）
		11月3日			水野龍とサンパウロ州農務長官による向こう3年間に日本移民3000人の輸送契約成立。	25周（5） 発展（52）
1908	明41	3月	員安叔父の勧めで南米行きを決意。	回想（111）		
1908	明41	4月9日	ペルー行きゴム採取移民副監督の名目。しかし徴兵忌避の手段として急遽ブラジル行に変更。	回想（113） 旅券（熊本）		
		4月28日	第1回伯剌西爾行笠戸丸移民781名・自由渡航者13名他の神戸港出港。	回想（120） 渡航（非移民） 25周（9）		
		5月3日			通訳5人男（加藤順之助、嶺昌、仁平崇、大野基尚、平野運平）、シベリア経由でサントス入港。	25周（6） 年表（25）
		6月18日	サントス港着岸。香山のブラジル生活第一歩（香山23歳）。皇国植民会社代理人上塚周平の書記。	回想（139） 渡航（非移民） 25周（25）		
		6月27日－7月6日	契約移民、6配耕地に送出（ズーモン、カナーン、グアタパラー、フロレスタ、ソブラード）。	回想 （143－144） 25周 （26－31）		
		8月25日	ズモーン耕地配耕の52家族引揚げ。	回想（148）		
		9月4日	ズーモン農場脱耕者9家族を率いて、ノロエステ線サンジョアキン駅（後のトレード・ピザ駅）サンジョアキン耕地入植。ノロエステ線最初の日本人入植地となる。香山は移民と共にノロエステ線のビオネイロ（開拓者）第1号。	回想（149） 40年 （53.132.） 発展（347） 25周 （32－34）		
		10月6日	監督廃業、皇国植民会社書記従事。	回想（158）		
		10月14日	橋口重正・タニの長女ローザ芳子、サンジョアキン耕地で誕生。	清A（1585）		
		10月			ズーモン農場脱耕青年28名を引率の有川新吉、サンパウロ・パラナ線フワシナ駅付近の鉄道工夫。日本人初の鉄道工夫団誕生。	25周（34） 40年（132）
		12月20日			ノロエステ鉄道変更線アラサツーバ開通。	ブ全（450）
1909	明42	7月			元フロレス耕地通訳大野基尚、フロレス耕地及びズーモン耕地退耕者23家族57名を引率、ノロエステ線イタブラ駅付近の鉄道敷設工事従事。（第2回鉄道工夫団）	発展（346）
		11月16日			野田良治二等通訳官、ペトロポリスに着任。星名謙一郎着伯。	外年（91） 年表（28）
		12月15日	皇国植民合資会社廃業、上塚や香山の失職、玩具製造、コッペイロ（家事使用人）など就労。	回想 （159－168） 25周（38）		
1910	明43	6月28日	旅順丸移民4家族の耕地監督兼通訳としてグアリローバ耕地に入植。10月末解雇、サンパウロ帰還。	回想（178） 25周（45）	旅順丸の竹村商館移民251家族945人サントス港着。この頃パウリスタ線バウルー支線開通。	回想 （178－188） ブ全（450） 25周（40-41）

		10月11日			水野龍、サンパウ農務局と宣伝用コーヒー豆の請負を約し、カフェー・パウリスタ第一店舗を東京開店。香山長男夫陽、日本留学時に勤務。	発展（307－308）
		10月末	大野基尚に代わってモジアナ線ジャタイ耕地通訳	回想（184） 25周（54）		
1911	明治44	1月8日			藤田敏郎一等書記官、臨時代理大使としてペトロポリスに就任。	外年T11（193）
		1月21日	橋口重正の次女静子誕生（リオデジャネイロ州イグアッペ植民地）	回想（200）		
		1月30日	ジャタイー事件。第2回移民、耕主側への負債返済のため青年13人とマットグロッソ州トレースラゴアス付近の鉄道工事人夫。マラリアに罹患。	回想（183－194） 25周（54）（56－59）		
		2月16日	リオデジャネイロ州イグアッペ植民地橋口重正、マラリアで死亡。	回想（200）		
		6月9日			大統領令第6485号によるモンソン第一植民地（1919年開設）に、鈴木貞次郎の仲介で日本人4家族入植、日本人移民初の自営農地。	回想（230） 25周（67） 発展（376）
1912	大1	4月28日	竹村植民商館通訳として、24家族を率いてグアタパラ隣接地サンタ・オリンピア耕地入植。	回想（217）	第3回移民船（竹村植民第2回移民）厳島丸サントス入港（移民数1432名）。	概史（51） 渡航（第3回）
1913	大2	11月	橋口重正未亡人タニと結婚。一度に1男2女の父親。	回想（237）		
1914	大3	3月	上塚周平一時帰国。香山は松永、鈴木等と共に玩具製造始める。	回想（240）	サンパウロ州政府による4月以降日本出港の日本人移民の渡航費補助中止（第1期補助金中止）。	概史（52） 回想（233） 25周（63）
		8月11日	物価高騰で玩具製造中止。モオカ地区でのポルトガル語教師、ペンキ塗師などの貧窮生活。	回想（228.240）	第一次世界大戦（～1918年11月）。日本国内に大戦景気起る。	回想（246）
		10月30日			ノロエステ鉄道貫通。現在のマットグロッソ・ド・スル州カンポグランデ近隣で連結。	伯史（260） 発展（346）
		12月	長女露子、誕生（サンパウロ）	回想（485）		
		12月	モジアナ線ブロドウスキー駅モーロ・アルト分耕地、日本人コロニア総監督村崎豊重を頼り移動。初めて農民としての仕事を経験。	回想（247－250）		
1915	大4	3月下旬	村崎豊重家族とソロカバナ線モンソン第一植民地ラランジェイス区入植。2アルケールの借地農。香山が移民となった瞬間。当時の日本人入植者は28家族100余名。	回想（255）		
		7月14日			サンパウロ日本帝国総領事館正式開設。初代総領事松村貞雄。	25周（75） 発展（142）
		10月	第1モンソン植民地リオ・パルド区に大蝗害発生。この頃大阪朝日新聞からブラジル通信員に任命辞令あり。香山が新聞人になる契機。	回想（263.266） 年表（36）	パナマ運河経由の大阪商船南米航路開設。	年表（36）
1916	大5	1月1日	星名謙一郎、サンパウロで週刊『南米』創刊。協力者輪湖俊午郎。	回想（270） 発展（384）		
		3月31日			ブラジル移民組合組織される。竹村、東洋、森岡各移民会社の共同。1917年にサンパウロ支店開設。	25周（64） 40年（89）
		8月31日	『日伯新聞』創刊。金子保三郎と輪湖俊五郎による共同。	回想（278） 発展（259）		
1917	大6	2月25日	長男夫陽誕生（モンソン植民地カポン・リッコ区）。	回想（280）		

		6月15日			補助移民再開。若狭丸サントス港着。ブラジル移民組合サンパウロ支店長刈谷三市、黒石清作、高岡専太郎医師、半田己子次、杉本芳之助などが乗船。	40年（90） 発展（313） 年表（39）
		8月31日	『伯剌西爾時報』創刊。社主黒石清作。邦字新聞としては最初の活字新聞。上塚周平再渡伯。	回想（281） 年表（39）		
		12月1日			海外興業株式会社（海興）創立。（日本）	25周（65） 概史（53） 発展（174）
1918	大7	5月13日	上塚第一植民地、エイトール・レグール（現在のプロミッソン）に開設。香山は山伐請負師となる。8月初めて家を建てる。	回想（278） 発展（359） 年表（41）		
		7月1日			リベイロン・プレットにサンパウロ総領事館分館開設。初代主任は副領事三隅棄蔵。	発展（148） 年表（41）
		12月	香山次男エイトール、エイトール・レグール植民地で誕生。名付け親は上塚周平。	回想（305）		
		12月11日			海外興業株式会社、州令13325号によって営業許可となる。	25周（65） 年表（42）
1919	大8	4月4日			海外興業株式会社と伯剌西爾拓殖組合合併す。	40年（91） 年表（43）
		7月1日			横浜正金銀行支店、リオデジャネイロに開設。	年表（43）
		9月26日			『日伯新聞』、金子保三郎から三浦鑿に経営権移譲。11月14日から活字新聞となる。	40年（408） 25周（597） 年表（44）
1920	大9	9月8日	藤田敏郎サンパウロ総領事就任。	発展（147） 年表（45）	上塚、イタコロミー植民地開設。同時に鈴木貞次郎プロミッソン駅コレゴアズール植民地開設・分譲開始。	回想（292－299、309）
		12月11日			サンパウロ州政府農務長官ヘイトール・ベンテアードによる日本移民への補助金拒否。これによりサンパウロ州政府による第2期補助移民終了。	40年（91） 発展（318）
1921	大10	1月1日	上塚周平と訣別	回想（316）		
		1月20日	バウルー日本領事館開設。多良間鉄輔領事代理として就任。	発展（150）		
		5月6日	『伯剌西爾時報』社に香山六郎名で『聖州新報』発刊予告を掲載。	時報（187）		
		5月	エイトール・レグールを去り、バウルー駅奥ビラ・ファルコン2kmに転住。新聞社開設準備を始める。	回想（325）		
		9月7日	バウルー市で『聖州新報(Semanario.de.S.Paulo)』創刊。社主香山六郎。創刊当初は手書きのジンコ版。発行部200部。	回想（325） 25周（624） 40年（407）		
		11月	ビラ・ファルコン1kmに転住。バウルーでの取材が楽になる。	回想（327）		
1922	大11	5月13日			ノロエステ日本人会創立総会・プロミッソンにて。	年表（48）
		9月7日			ブラジル独立100年祭。日本からは巡洋艦「浅間」他2隻参加。	年表（49）
1923	大12	2月23日	バウルー駅近くのノロエステ街サンタ・カーザ通り11番に転住。郵函58。	回想（301） 聖報（71）		

		5月1日			日本公使館が大使館に昇格（南米最初の大使館）。堀口久万一り臨時代理大使。5月28日には野田良治臨時代理大使となる。	官僚（51） 25周（597）
		6月			ノロエステ線グアインベーに第二上塚植民地開設。	年表（50） 25周（597）
		8月16日			田付七太初代特命全権大使就任。	官僚（51） 回想（347） 外年 （T15/135）
		9月1日			日本、関東大震災。此の頃バウルー市に平田旅館（社主平田崎太郎）・日本旅館（社主沖山心平）開業。	回想（337）
		10月22日			レイス移民法案連邦下院提出	40年（419）
1924	大13	3月2日			在サンパウロ帝国総領事館サントス出張所開設。（領事館昇格は1936年11月1日）。	発展（149）
		3月28日	本社をバウルー市ノロエステ街からピヨタン街15－13.郵函58へ移転。	聖報（125） （126）		
		5月26日			アメリカ排日移民法成立。	年表（52）
		9月			日本政府によるブラジル移民全員への船賃支給と移民会社への手数料（1人当たり35円）も政府支給となる＝国策移民の開始。	25周（597） 発展（177）
		10月1日			ノロエステ線にアリアンサ移住地創設。2200アルケールの登記終了。11月2日、信濃海外協会による移住地建設開始。	25周（597） 発展（363）
1925	大14	5月8日	印刷技術をジンコ版から活字版へ変更。	聖報（177）		
		7月10日	上塚周平による珈琲旱害救済のための「日本人土地所有面積等の申出」『聖報』に掲載される（請願運動の開始）。	聖報（186）		
1926	大15・昭1	1月29日	田付大使ノロエステ・奥ソロカバナ訪問（随行者は赤松総領事、江越信胤技師、原田書記生等）。	聖報（214）		
		3月22日			珈琲旱害被救済者低利貸付金85万円議会で通過。横浜正金銀行リオ支店を介して貸付準備となる。	帝国（51）
		4月7日	香山次女秋子バウルーにて誕生。7ヵ月の未熟児。母タニ43歳。	回想（347）		
		12月12日	星名謙一郎、アルバーレス・マッシャード駅にて暗殺される。	聖報（259）		
1927	昭2	2月26日	八五低資貸付金ノソロカバナ線・ノロエステ線沿線希望者に貸付終了。	聖報（273）		
1928	昭3	4月8日	香山六郎『のろえすて日本人年鑑』.聖州新報社発行。	聖報（416）		
		7月20日	印刷機をミネルバ式ピッチトップ型カラプラネッタ式シリンドルに交換。	聖報（432）		
		8月30日	プロミッソン入植10年祭。	聖報（437）		
1929	昭4	3月25日			法令3708号持分会社法による有限責任ブラジル拓殖組合（ブラ拓）創立。海外移住組合現地事業組織。	年表（63）
1930	昭5	1月15日	リンス支社開設。	聖報（507）		
		3月7日	新聞をゼルマニア型に変更。	聖報（514）		

		4月9日	『アリアンサ時報』創刊。アリアンサ移住地、社長宮尾厚、主筆中川権三郎。1937年アラサツーバに移転し『日伯共同新聞』と改名。	年表（66）		
		7月30日	香山六郎『ノロエステ、ソロカバナ、バウリスタ三線邦人年鑑』聖州新報社発行。	年表（67）		
		11月3日			ジェツリオ・ヴァルガス政権掌握。国家主義時代到来。	ブ全（412） 年表（66）
1931	昭6	1月1日			移民入国制限令。ただし、日本移民に限り同年1月12000人の入国を許可。	概史（63） 年表（67）
		3月23日			ブラジル連邦共和国司法大臣による三浦鑿国外追放令。6月1日、大統領令により追放取消となり、カナリア諸島ラ・パルマス港よりブラジルに帰国（第1次国外追放事件）。	風狂 （363－366） 年表（68）
		8月11日			改正新内国人雇用令公布。個人、企業、協会、組合、会社で5人以上雇用の商工業者は、その3分の2以上ブラジル人を雇用すべし。	70年（73） 議会（67回） 年表（68）
		9月7日	本社をビヨタン街からモンセニョール・クラーロ街4－35に移転。『聖州新報』創刊10周年記念号発刊。以後、週2回5,300部発行。	聖報（591）		
1932	昭7	1月14日	『日本新聞』創刊。社主翁長助成、主筆中西周甫。沖縄県人らによる『旧南米新報』を買収し創立した。	年表（69）		
		6月			日本政府、ブラジル移民に対し渡航費補助の外満12歳以上1人につき50円の渡航準備金（支度金）も下付。	年表（70）
		6月25日	『北西民報』創刊。社主梶本明、ビリグイ駅。	年表（70）		
		7月16日	サンパウロ護憲革命勃発により、在サンパウロ邦人有志が赤十字後援団を組織し、革命支持の為の金品募集を4邦字新聞社後援の下に開始。	年表（71）		
1933	昭8	6月18日	在伯日本移民25周年記念祭。サンパウロ市ビラ・マリアーナ地区日本病院建設予定地で実施。招待された笠戸丸移民は60名。	議会（65） 年表（73）		
		12月1日			連邦令第235335号により、農債半減令公布。此の日以前の農民の負債を半減させる。八五低資も対象となる。その後3回の訂正により1934年5月12日付令第24233号により正式に公布。	議会（67） 年表（74）
		11月			外国移民二分制限法の制定	伯史（283） 40年（425）
1934	昭9	2月11日			水野龍と上塚周平勲六等旭日章伝達式。	発展（360） 年表（76）
		4月23日			日伯産業組合中央会創設。	年表（77）
		7月16日			ブラジルで1934年憲法公布。1934年憲法第151条補項第6号により外国移民二分制限法公布。日本は過去の入国数124,457人により、その割り当て数は2,489人となった。	伯史（283） 25年（598） 40年（427） 概史（65,71）
		8月20日	香山六郎著『在伯日本移殖民25周年紀念鑑』バウルーの聖州新報社にて発刊。	25周（奥付）		

		11月13日	『聖州新報』サンパウロ進出。呼称もNoticias de S.Pauloと変更。創刊905号目がNoticias de S.Paulo発刊第１号。週２回発行。住所：アセンブレア街16番地。（『聖州新報』隆盛期）。	聖報（905） 40年（206） 回想 （379－382）		
1935	昭10	１月20日			『日伯』創刊20周年記念日本訪問団。（２年半にわたる三浦の日本幽閉）、1937年５月30日、サントス着。	風狂（371）
		４月	長男の夫陽、日本留学。早稲田大学入学、聖州新報への日本語通信開始。1937年。熊本第６師団歩兵13連隊入隊。除隊後、東京のカフェー・パウリスタ通訳、ラジオ東京のアナウンサー。1941年１月、妻実子と共に帰伯。	回想 （376.401） 聖報（1678）		
1936	昭11	７月６日	上塚周平死亡（享年60歳）、墓碑銘揮毫は香山が市毛総領事に依頼。	回想（399） 清A（1090-1097）		
1937	昭12	７月18日	此の頃から日支事変関係記事ばかりとなる。	聖報（1115）	外国語新聞・雑誌発行取締り規制公布。	年表（85） 取締（133）
1938	昭13	８月３日	『聖報歌壇』の歌集『移り来て』発刊。女性記者須貝富美子の活躍。香山の雅号は「素骨」。	聖報（1121） 40年（334） 回想（387）		
		８月23日	『聖州新報』第1279号、『伯剌西爾時報』第1376号より日刊紙となる。『日伯新聞』は25日の第1187号から日刊紙となる。	聖報（1129） 回想（388）		
1938	昭13	８月	女性記者須貝富美子撰による歌集『移り来て』創刊			
		11月	日本からブラジル向けラジオ放送（東京ラジオ）開始。香山夫陽、ポルトガル語のアナウンサーとして活躍。	年表（88） 聖報（1678）		
1939	昭14	５月27日	『日伯新聞』第1716号を以て発刊停止となる。	日伯（1716） 年表（90）	三浦鑿国外追放（第２次国外追放事件）。	風狂（420） 年表（90）
		９月１日	新聞・雑誌の記事検閲始まる。主要記事へのポルトガル語訳添付義務、ポルトガル語欄併設指示。	取締（133）		
		９月13日	『聖州新報』紙面２頁の日刊紙。９月21日からは１頁目が1940年１月13日までポルトガル語版。	聖報 （1948. 1680）		
		９月25日	『聖州新報』本社をコンデ・デ・サンジョアキン街93番地に移転。発行人を長女の香山セリーナ露子に変更。	聖報（1959）		
1940	昭15	７月25日	旧日伯新聞が『ブラジル朝日』と改称ポルトガル語版で発刊。	年表（93）		
1941	昭16	５月30日			在伯外字新聞発行禁止令。	取締 （178－１）
		７月30日	『聖州新報』廃刊宣言、第2236号。	聖報（2236） 取締 （314－２） 回想（397）		
		８月９日	『伯剌西爾時報』休刊、第2550号。1946年12月21日復刊。	時報（2550）		
		８月31日	『日本新聞』廃刊。	年表（95）		
		12月	『ブラジル朝日』停刊。	年表（95）		
		12月８日			太平洋戦争（～1945年８月15日）。	年表（95）
1942	昭17	１月19日			サンパウロ州保安局、敵性国民取締り令公布・告示。公衆の場での自国語使用禁止、無断旅行・転居禁止、自国語記述物頒布禁止。	取締（361） 年表（96）
		１月28日	国交断絶、在外公館閉鎖。	年表（96） 交流（70）	日独伊三国人に対する取締り強化。	年表（96） 交流（70）
		２月２日			サンパウロ市内コンデ・デ・サルゼーダス街から日本人立ち退き命令（第１次立退き命令）。	年表（96） 交流（70）

		7月3日			日本政府代表引揚げ（1600名の日本人、交換船グリップス・ホルム号でリオ港出港。取り残された日本人移民間に棄民意識顕在化。	年表（96） 交流（70）
		9月6日			コンデ界隈、10日間の期限付第2次立退き命令。スペイン領事館内に日本人権益部設置。	年表（96） 交流（70）
1943	昭18	不明	香山の次男エイトール、バストスで結婚。妻秀子。	清A（1112）		
1944	昭19	不明	香山の長女セリーナ露子、尾関興之助とサンパウロで結婚。	清A（1108）		
1945	昭20	6月6日			ブラジル政府、日本に宣戦布告。	年表（99） 交流（53）
		8月16日	終戦のラジオ放送。香山『聖州新報』保存版全てを焼却処分。	回想（421－422）	終戦による勝組・負組問題発生。	交流（54）
1946	昭21	10月12日	『サンパウロ新聞』創刊、邦字新聞刊行第1号。年内に『南米時事』、『伯剌西爾時報』復刊（12月23日）。	年表（103）		
1947	昭22	1月1日	『パウリスタ新聞』刊行。週3回発行。1951年1月1日、日刊紙。	年表（103）		
		3月29日			日本戦災同胞救援会誕生。ブラジル名はComite de Socorro da Vitima da Guerra do Japão。香山は幹事（慰問袋係）となる。副会長矢崎節夫。	年表（104） 回想（427）
1949	昭24	1月1日	『日伯毎日新聞』創刊。サンパウロ市。	年表（106）		
		11月30日	香山六郎編著・発行『移民四十年史』刊行。サンパウロ市ニロ街145番地。	回想（434）		
1951	昭26	8月1日	香山六郎『ツピー語単語集』刊行。ツピー語・ポルトガル語・日本語対訳。	回想（435）		
1952	昭27	4月28日			日本とブラジルの国交回復。リオデジャネイロ大使館、サンパウロ総領事館昇格。	交流（80） 年表（114） 外年
		4月	此の頃から香山の病状悪化。全盲・聴力減退。	回想（まえがき、435） 清A（1391－1398, 1498）		
		8月	香山の次女ジェーニー秋子、脇坂勝則とサンパウロで結婚。	清A（1113. 1547－1553）		
1955	昭30	12月17日			サンパウロ日本文化協会設立。ブラジル日系人の中央機関となる。初代会長山本喜誉司。	70年（103） 年表（122）
1956	昭31	4月28日	香山70歳、笠戸丸神戸出帆48年目の記念日に『回想録』執筆開始。	回想（まえがき）		
1958	昭33	6月18日	日本移民50年祭。三笠宮ご夫妻ご臨席。香山はローザ芳子（笠戸丸移民二世残存者トップ）と共に三笠宮に面会。	清A（1588－1591）		
		7月15日	香山、「直筆ノート」34冊脱稿。	清A（1594）		
1962	昭37	3月末	次女の脇坂ジェニーによって「直筆ノート」の「清書ノート」転記終了。	回想（まえがき）		
1971	昭46	7月	香山の秘書桜庭マス江により「清書原稿A」転記作業1594頁分実施。	回想（まえがき）		
1973	昭48	11月2日	香山タニ死亡（享年91歳）。	脇坂（イン）		
1976	昭51	4月6日	香山六郎死亡（享年90歳）。	脇坂（イン）		
		8月	『回想録』脱稿。	回想（まえがき）		

下記（注）より筆者作成

注　典拠文献の表記方法

1. 元号の表記方法

元号	略記号	表記方法
慶応	慶	慶応３年　⇒慶３
明治	明	明治５年　⇒明５
大正	大	大正７年　⇒大７
昭和	昭	昭和９年　⇒昭９

2. 典拠文献び表記方法

典 拠 文 献	表記方法
香山六郎『回想録』香山六郎回想録刊行委員会．1976年。	回想
香山六郎『回想録　清書原稿Ａ』ジェニー脇坂．1976年。	清Ａ
サンパウロ人文研『ブラジル日本移民・日系社会史年表』同人文研．1996年。	年表
香山六郎『のろえすて日本人年鑑』聖州新報社．1928年。	北西
香山六郎『在伯日本移植民25周年紀念鑑』　聖州新報社．1934年。	25周
香山六郎『ノロエステ、ソロカバナ、パウリスタ三線邦人年鑑』聖州新報社1930年	三線
青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史上巻』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会．1941年。	発展
香山六郎編著・発行『移民四十年史』1949年。	40年
山本・須田『ブラジルの日系人人口推計』SOCIEDADE PAULISUTA DE CULTURA JAPONÈSA. 1957年。	人口
移民70年史編纂委員会『ブラジル日本移民七十年史』ブラジル日本文化協会．1980年。	70年
日本ブラジル交流史編纂委員会『日本ブラジル交流史』日本ブラジル中央協会．1995年。	交流
第51帝国議会衆議院予算委員会議録	帝国
帝国議会説明参考資料（略称：議会調書）	議会
外務省『各国に於ける新聞・雑誌取締関係雑件伯国の部単巻』外務省記録目録Ａ－３－５－０－６－16. 1940年。	取締
外務大臣官房人事課『外務省年鑑　大正15年』クレス出版．1999年。	外年
秦郁彦『日本官僚制総合辞典1868－2000』東京大学出版会2001年。	官僚
巻島得寿『日本移民概史』海外興業．1937年。	概史
佐藤常蔵『ブラジル全史』トッパンプレス．1984年。	ブ全
前山隆『風狂の記者　ブラジルの新聞人三浦鑿の生涯』お茶の水書房．2002年。	風狂
京都府第一中学校学友会『学友会誌』第８号1900年.。	学友
熊本済々黌同窓会名簿委員会『済々黌創立100周年記念済々黌同窓会会員名簿』同委員会．1982年。	済黌
日本大学百年史編纂委員会『日本大学百年史第１巻』日本大学．1997年。	日大
熊本県『外国旅券下付表及び進達』外務省．1908年４月９日。	旅券
皇国植民合資会社『第一回伯剌西爾移民渡航者名簿』海外興業株式会社．1908年。	渡航
『肥後世襲士籍』1862（文久２）年	肥後
聖州新報	聖報
日伯新聞	日伯
伯剌西爾時報	時報
ジェニー脇坂（日本国籍名はジェニー秋子香山）との国際電話インタビュー：2015年10月25日。	脇坂（イン）

3. 典拠文献と該当頁・号数の表記方法

典拠文献該当頁･号数	表記方法
香山六郎『回想録』210頁	回想（210）
香山六郎『回想録』210頁～215頁	回想（210－215）
外務省年鑑大正15年．135頁	外年（T15/135）
『聖州新報』第472号	『聖報』（472）